

三反園「紙上中繼」

田中真紀子「永田町血風録」

田中真紀子さんと『ニュースステーション』

久米さんと真紀子さんの掛け合い漫才

田中真紀子

これまで出会った政治家の中で一番印象に残っている人は誰かと聞かれたら、私は迷わずこの人を挙げる。機関銃のようなテンポで、はっきりと物を言い、相手をズバツと切る真紀子節は、とにかくわかりやすく、聞いている誰もがスカツとする。

真紀子さんのキャラクターはテレビ向きかもしれない。

『ニュースステーション』にも何度となく出演してもらったが、真紀子さんと久米さんの会話は絶妙で、漫才よりもおもしろかった。

その中でも私自身にとって思い出深く、今でも脳裏のうりに焼き付いて離れないのは、久米さんがキヤスターを務めた選挙報道番組『選挙ステーション』での出来事だ。

真紀子さんはニュースステーションをよく見ている、初対面の時も、「国会記者会館の三反園

さん」と親しみを持って応対してくれた。余談だが、『ニュースステーション』に出演していると、このように初対面でも相手が自分を知ってくれていることがよくある。取材する相手はテレビで私を見ているため、初対面という意識があまりないのだ。だからすぐに打ち解けて、取材もスムーズにいくことが多々ある。

話を真紀子さんに戻そう。1998年7月12日に行われた参議院選挙の時のこと。真紀子さんの夫、田中直紀さんが新潟選挙区から出馬していたが、知名度は今ひとつで、ボーダーラインとみられていた。

当然、真紀子さんのボルテージは上がり、応援にも熱が入る。私はその真紀子さんの奮闘ふんどうぶりを見に行こうと新潟を訪れた。それともう一つ、『ニュースステーション』への出演依頼も兼ねていた。訪れてみると、案の定、各会場で真紀子節を爆発させていた。

「いろんな候補者と見比べてください。公認もされていない哀れなこのプリンスをぜひ応援してください」

どこに行っても拍手大喝采で、観衆は真紀子さんのパワーに圧倒された。直紀さん本人はとうとう、

「少し頼りないところもありますが、候補者は私です。田中真紀子の話を聞きたいでしょうが、私の話を10分くらい聞いてください」

そうすると真紀子さんは、直紀さんをアピールしようと、こつ合いの手を入れる。

「昨日はどこへ行ったかね、パパ」

真紀子さんは、夫の直紀さんを人前でいつもパパと呼ぶ。そして、演説の最後に必ずこう付け加えた。

「真紀子と書かないように」

投票用紙に真紀子と書いても、直紀さんの票とはならないからだ。

真紀子さんは私の出演依頼に対して、快くOKを出してくれた。この時に「今が我が家、最大のピンチでしょ。あーあ、疲れた。我が家には周期的にピンチがくるんですよ」と語っていたことを思い出す。まさか、この時、自らが議員辞職するほどの超度級のピンチが襲ってくるとは、彼女も想像しなかったに違いない……。

そして、1998年7月12日、『選挙ステーション』では、新潟の田中直紀事務所とスタジオを中継で結んだ。

久米さんと真紀子さんの会話が始まった。

久米「候補者の直紀さん本人ではなくて、奥様と中継がつながっているんです。こんなことしていいんでしょうか。あれだけ、目立たないように目立たないようにしていた真紀子さんと、不本意ながら、お話をしてみたいと思います」

久米さん一流のジョークにスタジオが爆笑に包まれた。久米さんが「田中真紀子さん」と呼びかけた。真紀子さんも笑いながらゆつくりとした口調で切り返した。

真紀子「あきれたく、不本意なのはこちらですよ」

そして、不満そうに「私にせひとも番組に出るようにとの話があったんじゃないですか」と言い返した。

久米（笑いながら）「どうも恐れ入ります。でもいつも驚くんですが、すごいスタミナですね」

真紀子「いいえ」

久米「何でそんなに元気なんですか」

真紀子「わかりません」

久米「声も大きいし、もー、疲れを知らないし……」

真紀子「追い詰められているからなんです。久米さんと同じように」

久米（ブツと吹き出して）「何で僕が追い詰められているんですか。ぼくは実は田中直紀さんという方をあまりよく存じあげないものですから、ああいう立場にはあまりなりたくないなど。どうやっても奥様のほうが声も大きいし、有名だし、真紀子さんと声をかけられて、隣にいるのが誰だかわかんないわけですから、誰と歩いたっていいわけですからね」

真紀子（笑いながら）「意地悪ね、相変わらず。いい人なんです、すごく。私なんかと一緒にいられるわけですから天然記念物です」

久米（間髪をいれずに大きな声で）「そう。話を最後まで聞いてください。田中直紀という方の物の考え方がずーとわからなかったんです。ひょっとしたら、田中直紀という人物は大人物では

なかるうかと」

真紀子「はい」

久米「言ってみれば、あなたのような奥様を許している。放し飼いにしているわけですよね」

真紀子さんは、「ハッハッハッ」と大笑いする。

久米「いつもナンバー２で、何をやったって自分の妻のほうが目立ってしまふ。妻のほうが有名だし、妻のほうが話もおもしろいし、ひよっとしたら妻のほうが頭もいいと……」

真紀子「そんなことを思っているのは久米さんだけ」

久米「直紀さんて頭のいい方なんですか」

真紀子「頭もいいし、数字にも強いし、よく勉強しています」

久米「ぼくは頭の良し悪しは別にして、人物の大きさの話をしているんです」

再び、真紀子さんのハハハとの笑いが入る。

久米「(直紀さんは)全部受け入れる」

真紀子「懐ふしが深い」

久米「そう。嫌みじゃなくて……」

真紀子「嫌みっぽく聞こえましたけど……」

久米「本心から思ったんです。今、VTRを見ながら。田中直紀という人物はひよっとしたらすごいんじゃないかと。人間的にかなり彼は大きいんじゃないですか」

真紀子「はい」

久米「その辺は昔から見抜いていたんですか、途中からですか」

真紀子「初めからすごいなーと思っていましたね。いろんなすごさがありますよ。中身も強いですよ」

久米「そうですね」

真紀子さんは一転、「そうですね。久米宏の餌食えじきなんかにはならないぞって、さつき言ってます」と強い口調で言う。

久米「僕ほど、彼の人物の本質に気づいている人はいないと思いますけどね」

と、言っている間中、真紀子さんは「ンンンン、ハハハ、フフフフフ」と奇妙な笑い方をするので、久米さんは「気持ち悪い笑い方をしないでください、ハハハ」と返す。

真紀子「学生同士じゃないんだからやめてください」

久米「今度、時間がありましたら、学生時代の話でもしましょうか」

真紀子「そうですね。久米さんは地のまんまで仕事ができるから幸せですよ。天然記念物」

久米「ハハハ。ありがとうございます。旦那様だんなによるしくお伝えください」

小宮さんは感心しながら「おもしろいですね。お2人の会話は」と、ちゃちゃを入れた。久米「ほとんど中身はなかったと思いますよ。昔からこれですから」

小宮「ずっと聞いていたかったですよ」

激怒した真紀子さん

このように参議院選挙の時は、何もかもがうまくいった。しかし、2000年の衆議院選挙の時は思わぬ試練に見舞われることになった。

2000年6月25日。午後7時50分過ぎ。『選挙ステーション』の番組が始まった。久米さんが番組の冒頭、軽いタッチで「田中真紀子さん、見てますか」。ぜひ、この番組にご出演お願い申し上げます」と切り出した。

番組を見ていた人は、単なる出演依頼と思っただろうが、私は番組を成功させるためにも、この久米さんの呼びかけに応じて真紀子さんが何とか出演してくれないかと必死の思いだった。というのは、真紀子さんはあることに怒って、この番組への出演を直前にキャンセルしていたのだ。

真紀子さんを怒らせたものは何だったのか。

投票日の3日前。私は真紀子さんが出馬している新潟県の長岡市を訪ねた。真紀子さんに会い、『選挙ステーション』への出演を要請するためだ。真紀子節を遠くから聞いていた私を見つめるや否や真紀子さんは、「ニュースステーションの三反園さんが何しに来たのか、来ています」と紹介するなど、幸先はいい感じだった。

私は選挙カーに近づいて、「遊説が終わったらコーヒーでも飲みましょう」と誘った。遊説が終わると、真紀子さんは長岡駅前にある定宿のニューオータニ長岡に到着した。夜ということも

あり、真紀子さんはレストランで待つようにと言ってエレベーターに乗り込んだ。テレビ朝日の真紀子番の記者も一緒だった。

この記者は『ニュースステーション』で放送する予定の「真紀子物語」を作るため、カメラマンとともにずっと彼女に密着取材をしていた。

私は元氣よく現れた真紀子さんに、『選挙ステーション』への出演をお願いするために長岡を訪れたことを告げ、「1回だけではなく、数回出てほしい」と申し込んだ。

真紀子さんも機嫌が良く、快く受け入れてくれた。私はすぐに東京行き最終の新幹線に飛び乗った。東京駅に着くと、帰宅せずにスタッフルームへ直行し、真紀子さん出演OKの朗報ろうほうを伝え

た。『選挙ステーション』放送の前日の早朝、自宅の電話が鳴った。真紀子番の記者からだった。あせっている。だが、何が言いたいのかわからない。「すみません。すみません」を繰り返すばかりだった。

よくよく聞いてみると、真紀子さんが怒って、『選挙ステーション』への出演はしないと申し出したというのだ。一大事である。頭の中が真っ白になった。どうにか説得して出演してもらえない。放送日は明日に迫っている。

なぜ、真紀子さんは怒ったかというところ、こついつことだった。真紀子番の記者が最後の訴えを取材しようと投票日の前日、いつものように真紀子さんの姿を追っかけていた。やがて昼食時

になった。記者は、昼食の風景を撮影させてもらおうとした。だが、その記者は、真紀子さんが休憩している部屋の個室のふすまを勝手に開けてしまったのである。開けた途端に真紀子さんは「休憩中に失礼だ」と怒り出した。

真紀子さんとしてはくつろげる数少ないひとときを邪魔されたとの思いがあったのだろう。「図々しいにもほどがある」との強い怒りだった。記者は慌てた。「申し訳ありません」と何度も繰り返し謝罪したが、真紀子さんは「選拳ステーション」へは出演しないと通告した。

記者は前の日に私と一緒に会った時の気さくな真紀子さんを見て、つい欲が出てしまったのだろう。真紀子さんの逆鱗げきりんに触れ、自分で何とかしようとする記者も思ったようだが、真紀子さんの機嫌はついに直らなかつた。

最悪の事態が起きてしまった。2人で対応策を検討したが、良いアイデアは見つからない。とにかく本人と話すしかないと思い、電話してみたが真紀子さんとながらない。私は考えあぐねたあげく長岡に行くことにした。

「会つてもどう説得すればいいのか」

私自身に妙案みょうあんはなかつた。なぜなら、真紀子さんの性格を知っているだけに、すぐに許してもらえらると思えなかつたからだ。ましてや会つてくれるかもわからない。そこで『ニュースステーション』に賭ける思いを滔々うたうたとつづつた手紙を用意し、長岡で本人に手渡すことにした。

長岡に到着後、ホテルニューオータニで真紀子さんを捕まえ、話をしようとしたが、応じてく